

季刊 ジャネット Ja-Net

No.21

2002年4月25日発行

View from the Other Side	3
あちこち日本語ご紹介 [島根県 浜田市]	4
あちこち日本語ご紹介 [ラオス ヴィエンチャン]	5
教材紹介 『日本語教育をめざす人のための 基礎から学ぶ音声学』	6
『こどものほんご1』	7
『日本語でボランティア 外国語として日本語を教えるって?』	7
なんでも情報BOX	8

Ja-NetはJapanese Networkの略です。「にほんご」を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

スリーエーネットワーク

巻頭寄稿

日本で学ぶ日本語を母語としない子どもたちと関わって

社団法人 国際日本語普及協会 事業部長
関口明子



B: 「先生、Aくん、3回」

私: 「えっ、そう?じゃBくん答えて」

先日(2月)、ある小学校のコミュニティセンターで放課後外国籍の1年生8人の日本語指導をしている時の話である。Aくんは家庭生活における躰もされず、授業内容にもついていけず、全て投げやりになっている子どもだった。

しかし、素直で子どもらしい心を持っていた。

私の質問に手をあげる子どもたち。Bくんは、私がAくんにあてた回数が多いと訴えたのだ。

とても気になる子どもに心が向いてしまう。そこをつかれて私ははっとした。

そのくらい子どもたちは敏感に教師の心を見ている。

日本語支援とは

学校生活で、他の日本の子どもたちのように教室で自己を表現できない。でも皆自分の存在を認めてほしいと思っている。その子どもたちが自信を持ち、生き生きと学校生活が送れるようになることを願って、それを目標として日本語の学習に関わっていくことが彼らへの日本語支援であると私は考える。具体的には以下のことが日本語支援で必要なことであると思う。

1 信頼関係の重要性

20年ほどインドシナ難民の子どもたちや、他の外国籍の子どもたちに日本語を指導してきたが、やはり一番大切なのは子どもたちとの間に信頼関係を持つことである。信頼関係はどうしたらできるのだろうか。

まずその子を好きになることではないだろうか。その子の存在をまるごと認める。欠点も長所も全部。それができたら、子どもは必ず心を開く。本当に子どもたちはそれぞれ輝いてい

る。いいところは必ずある。

外国籍の子どもに関わっている教師やボランティアの方々から、よく質問を受ける。「授業が本当にわからなくてかわいそうです。教えてあげても、時間が短しいし、効果はほとんどないんです。次から次へと新しく覚えなければならぬことが増えて」本当におっしゃる通り。でもその時私は「一步一步、少しずつ力がついていくと信じて、諦めないでください。彼のこと、彼女のことをこんなに見つめて、心配している人が存在することは彼らにとって何よりも大切なことですから」と答えている。

2 生活言語 (BICS) と学習言語 (CALP) の関係を認識する [注 1]

先生や同級生とは一見べらべらと日本語でコミュニケーションをとっている (生活言語習得済み) 子どもが、教科学習にはついていけない (学習言語未習得) という現象が見逃されてきている現状は何を物語っているのか。

いわゆる目標言語の生活言語 (BICS ex. 学校へ行きます。いくらですか等々) はその言語が使用されている環境では3月から1年で習得できるといわれている。一方学習言語 (CALP ex. 二等辺三角形、作者の意図は何ですか等々) は5年から9年かかるといわれている。

周囲の大人がこの違いを認識せず、混同してきた年月のつけが小学生の頃に来日して現在進学問題に直面している中学生等にあらわれている。生活言語をマスターしていても学習言語は意識的に学習しなければ身につかないものであり、時間のかかるものであるということを子どもたちの周囲にいる大人が認識していなければならない。

3 日本語学習と教科学習の関係をしっかり把握する

初期指導

生活言語がまだわからず教室でも皆の話していることを理解できない時期。この時期はいわゆる日本語教育の教科書等を使って挨拶から始めて生活に必要な日本語を教えるケースが多い。

この時期で気をつけることは、彼らの学校生活上最も大切な語彙や表現をまず教えることを忘れないでほしい。日本語教育の教科書にはその子に必要な個別の表現はのっていない。

私：「Cさんの学校の名前は？」

C：「……………」

私：「Cさんは何年何組？」

C：「……………」

Cさんに教えることになって会ったとき、彼女は1カ月半学校に毎日通った。国際学級にも通っていた。でも何という学校に行って何年のクラスにいたかを日本語で知らなかった。彼女にとって一番身近なことを知らなかった。まずその子にとって必要な語彙を情報として与えることは最初から必要なことである。

日本語学習と教科学習

生活言語としての日本語ができるようになっていく段階での教科学習との連携だが、生活言語としての日本語学習であっても、使う表現、そして語彙はできるだけ原学級で使われているものと関連を持たせて教える。たとえば上記の1年生にひらがな、かたかなの単語を文字学習として教えた。その際彼らの国語の教科書のこれから学習する単元にくだものや動物のグループ分けがでていた。そこで、ひらがな、かたかな単語の学習を、そこに出てくる単語で学習させた。これは国語の教科書を教えるのではなく、あくまで生活言語としての学習であったが、材料を教科学習の中から取り出した例である。彼らが原学級での学習に関係を持ちながら、しっかり日本語教育としての学習を行っていくことが必要だと考える。



実践を通して語彙と進行上のコミュニケーション表現を学ぶカードゲームに熱中するベトナムの子どもたち(中央：筆者)

4 国際教室の教師、巡回派遣指導員、日本語ボランティア等の資質向上とJSL [注2]

教師としての資格制度作りの必要性

英語圏の移民先進国でESL教育の専門性は確立されている。日本でも学校教育におけるJSL教育の専門性の確立が急がれる。日本人の子どもへの教科指導のプロである学校教師はそのまま日本語を母語としない子どもへの、教科と関連した日本語指導(JSL教育)のプロではない。日本人の子どもと同じやり方で教えることはできない。このことを国も学校も自治体も認識し、研修講座や制度作りを真剣に考えてほしい。

地球の21世紀を担う大切な子どもたち、その中で縁あって日本で生活している日本語を母語としない子どもたちに生きていくことの喜びを、幸せを感じてもらうには、周囲にいる大人の私たち1人1人ができることを少しでもやっていくこと、小さな声を束ねて少しでも大きな声にすること、そして法制化や、システム作りをめざして一步一步進んでいくことが解決への道につながると信じている。

[注1] B I C S と C A L P

Cummins&Swain (1986)の提唱した仮説。言語能力には日常の伝達に必要な言語能力と学習に必要な言語能力の二つの側面があり、それぞれ区別して考えられるべきであるというものである。前者はBICS (Basic Interpersonal Communicative Skills)、後者はCALP(Cognitive/Academic Language Proficiency)と呼ばれ、前者は文脈の支えがあり、認知的な負担が少ないコミュニケーションの場面で発動され、後者は文脈の支えが少なく認知的な負担が大きいコミュニケーションの場面で発動される。

[注2] E S L と J S L

E S L (English as a second Language) :
英語圏で生活するための、英語を母語としない人に対しての英語教育
J S L (Japanese as a second Language) :
日本で生活するための、日本語を母語としない人に対しての日本語教育

関口明子

社団法人 国際日本語普及協会 事業部長
横浜国立大学教育人間科学部非常勤講師「年少者への日本語教授法」「日本語教育演習」担当
東京外国語大学REXプログラム担当講師
JSLカリキュラム開発委員(文部科学省)
(財)アジア福祉教育財団難民事業本部大和定住促進センターにて主任講師としてインドシナ難民の日本語教育に従事(～1998)

著書及び研究報告

『かんじだいすき(一)(二)(三)』[(社)国際日本語普及協会]
『にほんごを学ぼう3指導書』(文部科学省)、
『日本定住児童の日本語教育-インドシナ難民児童の多様な言語背景と日本語習得』(『日本語教育83号』)他

VIEW FROM THE OTHER SIDE

香港からオーストラリアへ、そして日本へ。
体験を通して可能性を追求したい

嚴家仁 Yim Ka Yan Jonathan



1級日本語能力試験を目指して

私は日本に来る前に、オーストラリアで6カ月間週2回夜間学校で日本語を勉強し、日本語能力試験の4級に合格した。広東語が母語の私には、日本語の漢字の書き方と意味はよくわかったし、文法問題の量もあまり多くなく、85%位できたと思う。

去年4月に来日、日本語学校に入学して、12月の能力試験1級受験を目指した。日本語学校の過程は1年間だが、4月からの8カ月間で1級の試験の内容を勉強しなければならない。そんなに優秀な学生ではない4級の実力の私が、8カ月という短い時間で1級を受けられるようになるのか半信半疑だった。中国人は他の国の人より日本語の漢字を学ぶのは有利だ。漢字を見てその意味はわかる。けれども、日本語全体を見ると学びやすいというわけではないと思う。1級2級の漢字はかなり難しい。音読みと訓読みがあり、中国語と比べると全く違う意味になっているものもある。頭の中で中国語と日本語の漢字が混ざって大変慌ててしまうことがある。また試験では漢字のみならず、読解・文法、聴解も大切である。文法問題はかなり多いし、聴解問題はまるで異星人が話しているようだ。最近の聴解問題は数が多くなり、文は短くなっているように思う。他に手がかりになるヒントがあまりないので、もし単語を一つでも聞き逃したらそれまでだ。

ところで、留学生たちは日本で大抵アルバイトをする。日本での生活費は高いとよくいわれるが、私もそう思う。生活のためにアルバイトをしなければならないが、そこでは日本人の友達もでき、日本語で話す機会も多くなる。実際、日本語会話の練習ということを考えれば、役に立つと思う。しかし、しすぎるといういろいろな問題が出てくる。例えば勉強の時間が少なくなる、疲れてしまって、学校の授業に100%集中することができない、などだ。1級の試験準備の勉強は他の何より最優先させなければいけないと思う。私は頑張って試験勉強をしたのだが、結果は残念ながら3点足りなかった。

オーストラリアへ移民した事

「なぜ外国へ移民したか」とよく聞かれる。1990年から'96年にかけて、香港では「移民」が話題になったのは不思議ではなかった。多くの人がカナダかオーストラリアへ移住していった。それは'97年に香港が中国に返還されることになってからだ。約100年間、英国の制度の元で育ってきた私達は貿易や政治や言論など自由だ。返還後、そんな自由な生活が続けら

れるのか、共産制度になるかわからなかった。香港人が中国政府に保証された「一国両制」という制度がどうなるのか不安だった。

英国政府が統治している内に外国の国籍をとったほうがいいという考えはかなり多かった。

1990年私は自分の進路を考えた時、オーストラリアの大学を選んだ。移民の手続きには時間がかかったが、3年後家族もオーストラリアに渡ってきた。

オーストラリアから日本へ

「なぜ仕事をやめてオーストラリアから日本へ来たのか」ともよく聞かれる。大学では製造工学を学び、卒業後はプロジェクトエンジニアとして働いていた。オーストラリアでは仕事も順調で生活も安定していたし、自由だったし、いい国だと感じていた。一言でいえば、もっと他の国、他の事を体験したいということだ。体験が多ければ多いほど人生観が深まり、かつ広がっていくのではないかと思ったからである。

一度香港へ帰って仕事をしようと考えた事もあるが、最近、香港の景気は悪くなる一方で仕事を探するのが前より難しいようだ。オーストラリアで仕事をしながら日本語を学んでいた私は日本でいろいろな事を体験したいと思って来日、1年間日本語学校で学んだが、さらに日本の大学院で経営学を研究する事にした。日本は、アジアの中で一番製造技術が高いと思う。今、日本の会社は中国の市場に進出し、工場を建設している。一方中国の発展のスピードも注目されている。大学院を卒業した後は、それまでの経験を生かした仕事に就きたいと思っている。

オーストラリアで大学と仕事を通して学んだ事、これから日本で学んでいく経営学と日本語、自分の母国である中国を意識しながら、いろいろな体験を重ねて自分の可能性を追求していきたいと思っている。

嚴家仁 Yim Ka Yan Jonathan

1972年香港生まれ。'90年にオーストラリアの大学に進学。'93年家族と一緒に移民した。'96年メルボルン大学卒業後5年間オーストラリアで就職。'01年3月来日。(財)アジア学生文化協会 留学生日本語コースで1年間日本語を勉強した後、'02年4月早稲田大学大学院入学

あちこち日本語ご紹介

国内編



島根県
浜田市

マリントークの会の5年間

マリントークの会
橋ヶ迫 劭

中国や韓国から来る国際交流員が異口同音に、日本での赴任先が「島根県・浜田市」と知らされた時、手元の日本地図に県・市ともに掲載されていないので、ずい分戸惑った、という。どうやら、広島島の北の方らしいと突き止めるのに日数がかかるそうである。そんな浜田市で日本語支援のボランティア活動をはじめたのがマリントークの会である。「Marine」とは、港浜田を表し、「Talk」は外国人とも気軽にお喋りが出来るようになりたい、との願望をしめす語である。

この会は平成9年2月から活動を始めたが、最初はレトルト関係の製造で働いている日系ブラジル人50余名が対象で、毎日曜日の午前、2時間の勉強であった。その年の秋、中国から水産加工の技術研修にきている4名の女性の熱望で、週1回の夜間学習会を開き、忙しくなった。テキストには『新日本語の基礎』を使用した。彼女達は翌年1月に帰国したが、替わって来た女性達も日本語学習を希望したので、もう1年間続いた。平成10年の春、県の繊維工場組合の研修生に4週間の短期集中講座が舞い込んだ。



毎年春には学習者と花見で交流。料理は各自の持参なので、料理の国際コンクールにもなる（右端が筆者）

この研修生達の内、浜田市の工場での研修する6名は、集中講座後も引き続いて勉強をした。来日半年後の試験準備のためである。また、この年の夏にはフィリピンから来て小学校1年に入学したばかりの娘の指導を引き受けた。2本の鉛筆でビー球を拾い上げる特技を持った子であった。

平成11年4月、ブラジル人達との勉強後、近くの土手の上で花見をした。料理は各自の持参である。韓国出身者もいたので、料理の国際コンクールとなった。この頃になると、多数いたブラジル人の学習希望者も、転職、転住などで10人以下に減じ、我々の方も、同様に転住、家庭の事情の変化などのため脱会者が増し、実働6~7人の有様であった。それだけに、意見の一致も早い！

この年の7~8月、また4週間の集中講義を要請された。対象はフィリピンの青年25人で中型底引き漁業船の乗り組み研修生である。いずれも漁業の専門学校卒の若者で、暑い最中によく努力していた。ただ、気になったのは我々の言葉と、男だけの船中の世界で使う言葉との差が大きすぎるのではなかろうか？ということであった。この講座は、翌年は休んだが、平成13年には復活し、11人の青年と汗を流した。彼らは原則として3年間は浜田にいるのだが、乗り込む漁船の操作の日程がそれぞれ違うので、全員での交流



マリントークの会は平成9年2月から活動をスタート。最初の学習者はレトルト関係の製造で働いている日系ブラジル人50余名。その後、中国、韓国、フィリピン、ベトナム等、様々な国の学習者に教える

の場が取れないのが残念である。

平成13年の春には、中国からの水産加工の研修生の集中指導講座（4週間）を行い、秋には別の水産加工業者が招いた研修生の集中講座も実施した。これも4週間、日曜日のほかは、朝9時~午後4時までの強行軍である。研修生も、我々も、終了したときはヘトヘトであるが、それだけに、達成の感激は大きい。

ベトナム人にも平成12年春から出会う事になった。水産加工の研修や自動車の部品製造会社の研修生で、毎日曜日の午後、2時間の学習で、彼女達もずい分素直で、よく努力している。

マリントークの会の目下の悩みは、会員数が少ない事、活動の拠点が無い事である。また教材や参考書などの保管場所も検討事項である。今後数年間の間、我々の活動の主な部分は4週間の集中指導講座となるだろうと思っている。会員数が足りないところは、江津市などの近辺のボランティア団体の応援を仰ぎながら頑張っていきたい。

あちこち日本語

ご紹介

海外編



ラオス人民民主共和国
ヴィエンチャン

癒しの国ラオスの日本語事情

ラオス日本人材開発センター
森戸規子

「昨年12月、「では、ラオスに行きます」と私が言うと、多くの友人が「いいわね。いってらっしゃい」の後に「ところで、ラオスってどこの国?」「たまにベトナムの様子を教えて」「カンボジアか。気をつけてね」と続けました。ラオスは、その魅力のとりこになった人々には驚くほど愛されていますが、まだまだ日本人には馴染みの薄い国だと思います。

ラオスはベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマー、中国に囲まれた内陸国で、メコン川に頼った水力発電による発電と木材加工のほかは産業がほとんどなく、援助に頼って生きている国です。最大のドナーが日本であるため、日本に対してはたいへん友好的であるとともに、その窓口のJICAという名前は国の隅々まで知られている感じがします。

私が勤務するラオス日本人材開発センター（以後LJセンター）は日ラオ両国の合意のもとにJICAプロジェクトとして2001年5月にオープンしました。ラオスの市場経済化のための人材開発を行う目的

で、ビジネスコースと日本語コースの運営、および日ラオ交流の催しを行っています。建物は、ラオス国立大学内経済経営学部棟の横にあります。

ラオスの首都であるヴィエンチャンの近年の日本語教育事情はというと、残念ながら驚くほど貧弱です。ラオス国の総合大学はラオス国立大学ただ1つで、ここでは選択科目としてもまだアジア言語を学ぶことができません。公的機関での一般的な日本語教育は皆無です。唯一行われているのが大学内基礎教育課程における20名前後の文部科学省留学候補生の

予備教育です。民間では、日本語学校（学習者100名弱）が1校と英語専門学校内に日本語のクラス（学習者10名前後）が1つ存在していますが、その他は、個人的に教えているだけでしょう。昨年未だにざっと数えたところ、ヴィエンチャン内の日本語学習者は約350～450名といったところです。1965年に青年海外協力隊の第1期で日本語教師隊員が入り、10年ほど日本語教育が精力的に行われたヴィエンチャンですが、1975年の政変を境に日本語教師隊員は姿を消したままで、残念です。これから、ゆっくり時



国内に日本語学習の成果を生かせる場がまだほとんどないため、難しい面もあるラオスの日本語事情。日本語教育がしっかりと根付くためには、これからゆっくり時間をかけて、努力することが必要（前列、一番右側が筆者）

間をかけて、日本語教育がしっかりと根付くよう努力する必要があると感じます。

LJセンター日本語コースは、そんな事情の中で、スタートしました。日本語学習に対する期待はものすごく熱いものがあり、150人の定員に対して700人近くの応募がありました。現在、200名余りの学習者が在籍しています。コースは、国立大学の学生教職員を対象とした学内コース、一般の社会人を対象とした一般コース、の2つの1年コースで一般的な日本語教育を行っています。他に観光産業の発展に資することを目的としたホテル

コース(ガイドコース予定)など短期集中コースがあり、そこでは日本語の授業のほかには日本人・日本文化また観光に関する講義を1回ずつ入れています。学習者は、初級前半が9割、残る1割弱が初級の中後半、そして、中級レベルの人が2、3人です。主教材は、『みんなの日本語初級』ですが、時間数の少ないクラスではJICAの教材、ホテルコースではLJセンター独自のテキストを使用しています。

ラオスにおける日本語教育の問題点の一つに、学習者にとって、学習の目的がはっきりしていないことが挙げられると

思います。これは、国内に日本語学習の成果を生かせる場がまだほとんどないため、仕方のないことかもしれませんが、多くの学習者が、もしかしら、いつか、訪れるかもしれない留学や就職のチャンスに漠然と努力を続けている節があります。日本語の授業でも、教師の言うとおりに素直に覚えようと努力しますが、実用に直結させようとする態度があまり伝わって

こないのが残念です。

ラオスと1年余りしか関わりのない日本人がとやかく言うてはいけないとは思いますが、いつかラオスの若者たちの何人かが、ある分野に関してがむしゃらに頑張っ一流をめざすようなエネルギーを持てるようになるために、日本語教育の分野から何か刺激できたらなと思いつつ、毎日学習者たちと楽しくかつ真剣に戦っています。

教材紹介

『日本語教育をめざす人のための 基礎から学ぶ音声学』

『こどものほんご1』

『日本語でボランティア 外国語として日本語を教えるって?』



『日本語教育をめざす人のための 基礎から学ぶ音声学』

名古屋大学留学生センター教授 鹿島 央

この本は、これから日本語教育に関わっていこうとしている方を主な対象として、ぜひ知っておくべきだと思われる「日本語音声」についての知識あるいは実際にご自分で発音するときのポイントをまとめたものです。もちろん、すでに日本語教育に関わりをお持ちの方で「音声」についてもう一度総復習をしようという方にも意外な発見があるかも知れません。このような意図で書かれていますので、前提となる知識はほとんど必要がないように気をつけました。

これまで「音声」についても、内外を問わず多くのすぐれた書物が出版されていますが、私の経験ではどれも「学問然」として、はじめて接する者にはとっつきにくく、「音声」って何かむずかしいものだなという印象がありました。その理由の一つには、もちろん新しい用語なども関係しますが、本文を読み進めながら納得できるような、実際に耳にする「音声」がないということが挙げられると思います。

実際に日本語教育に関わっている方が音声面で遭遇することは、いろいろな母語の学習者の「音声」です。そこには、日本語では聞いたことのないような音や、ちょっとだけ異なる音やとても違う音など、様々なものがあります。このような学習者の発音にせまっていくためにはどうしたらいいのでしょうか。いろいろな方法が考えられますが、ここでは日本語で用いられている音のどこを、どのように変えるとどのような音になるのかを体感する方法をとっています。本文を読みながら、付属のCDに耳を傾け、十分に口を動かして確認していただければと思います。CDには、学習者の発音した例もいくつか収録されていますので、上のような基礎的な練習とあわせてお聞きになり、日本語母語話者とは一体どのような音声上の違いが特徴となっているのかも観察できるようになっています。

一方で、学習者の発音上の特徴が「なぜ」生じるのかということも重要な問題です。これは、原因をつきとめるということですが、このことがわかるためには学習者の母語の「音体系」を知る必要がでてきます。まだまだ解明は進んでいませんが、いくつかの言語についてはヒントとなるような情報も書き加えました。

学習者の「音声」については分からないことが多いですが、上で述べたような学習者の音（これは直感的に「発音」と言われているものと同じだと思われませんが）以外にも、何かを「ことば」にして（例えば「とりにかかった」等）言ったときに、現れてくるような「音声」もあります。これらは、リズム、アクセント、イントネーションなどですが、特にリズムについては日本語教育で応用が可能な、重要な概念として一つの提言にまとめてあります。これらについても、できるだけ実際にCDに収録し、学習者の問題点もいくつか聞いていただけるようにしました。

そして、最終的には、学習者に対する音声教育はどのようにすればいいのかということが問題になってきますが、この点についてはここでは、いろいろな項目ごとにヒントを提示することしかできていません。現在、各日本語教育の現場で様々な音声教育の試みがなされていますが、よりよい方法をめざして進むためには基礎的な「音声」の知識と実際に運用する力が不可欠なことはいまでもありません。

そのために、この本が最初の一步としていくらかでもお役に立つことがあるなら、筆者としてはこれ以上の喜びはありません。

主な内容

第1章 単音（分節音）

単音の分類、音声表記、母音、子音、拗音、特殊音

第2章 音節

音声的な音節、音節の構造、音韻的な音節

第3章 韻律レベル

韻律的特徴について、リズム、アクセント、イントネーション、強調あるいはプロミネンス、ポーズ、テンポ

第4章 音声教育

音声教育は必要ない?、導入と練習の問題点、導入と練習のヒント

日本語教育をめざす人のための 基礎から学ぶ音声学

A5判 200頁 1,900円
CD付
鹿島 央 著



こどものにほんご 1

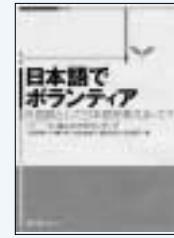
B 5 判 270頁 2,000円
西原鈴子 監修
ひょうご日本語教師連絡会議
子どもの日本語研究会 著
財団法人兵庫県国際交流協会 協力



日本語でボランティア

外国語として日本語を教えるって？

A 5 判 130頁 950円
グループにほんごでボランティア 著



『こどものにほんご 1』

昨今公立の小、中学校に外国籍の児童、生徒が急増しています。本書は日本語教育を必要としている児童のために「ひょうご日本語教師連絡会議」に所属する「子どもの日本語研究会」が作成したものです。

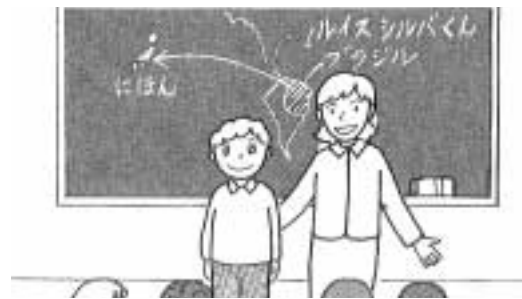
『こどものにほんご 1』では10歳のブラジル人の男の子ルイス・シルバ君が、日本の小学校に転入し、一学期の行事を通して日本の生活に慣れていく様子を描いています。学習項目は名詞文、形容詞文、動詞文の丁寧体現在と過去、そして名詞文、形容詞文、動詞文の普通体現在です。児童の日常使う日本語を考慮して普通体を早めに提出しました。構造シラバスを基本としていますが、場面シラバス、機能シラバスも取り入れています。

本書ではイラストを多用し、楽しく学べるよう工夫しました。巻末の絵チャートを利用して語彙を増やすこともできます。語彙には英語、中国語、ポルトガル語の訳が付いています。

ひょうご日本語教師連絡会議 子どもの日本語研究会 池上智恵子

す。授業は口頭練習を中心に行いますが、かな学習終了後は読み書きの練習も加えていきます。指導の際の参考にしていただけるよう「指導の手引き」も付いています。

子ども達がルイス・シルバ君と友達になり、様々な経験を共有することによって、いつの間にか日本語を習得できるようにと考えています。本書が学校教育の現場等で日本語教育に携わっておられる先生方のお役に立てれば嬉しく思います。



『日本語でボランティア 外国語として日本語を教えるって？』

横浜国立大学留学生センター 小田切由香子

この本は、これからボランティアで日本語を教えようと考えている方、現在すでにボランティアで日本語を教えている方を対象に書かれたものです。本書は全部で5つの章に分かれています。

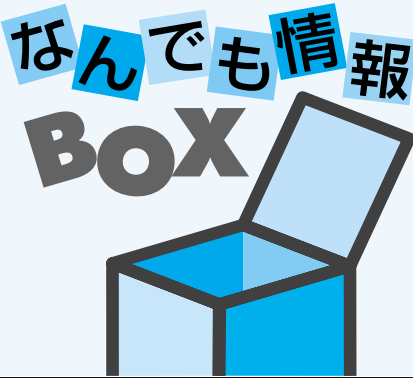
- ・ 外国語として日本語を教えるって？
- ・ 外国人とのコミュニケーションとは？
- ・ 教え方の形式にはどんなものがあるの？
- ・ さあ、教えましょう。でも、どうやって？
- ・ よりよいボランティア活動のために

日本語教育を全く知らない方は、ぜひ、 から読んでください。国語教育との違いから学習者とのコミュニケーションの方法まで具体的に知ることができます。すでに教えている方は、

以降の指導方法やボランティア活動に関する項目の中から必要なものを拾って読んでください。どの項目もすぐに実践で使えるように工夫してあります。例えば、1対1で教えるとき初

回にどのようなことをすればよいか、クラスで教えているときに学習者の能力差にどのように対応すればよいかなど具体的な指導方法が載せてあります。また、ボランティアどうしの人間関係で悩んでいる方は、 に相談とそれに対するアドバイスの形でまとめてありますので、参考にしてください。もちろん、すでに教えている方でも、 から全部読んでいただければ、ボランティアで日本語を教えることに関する基本的な知識を整理することができます。特に は、グループの勉強会や入門講座で使うことを想定して、課題に取り組みながら読み進むような形にしました。ぜひ、使ってみてください。

"グループにほんごでボランティア"のメンバーは、さまざまなボランティアグループの入門講座やブラッシュアップ講座で長年講師を勤めてきました。初めは個別に活動していたのですが、横浜国大留学生センターで出会い、その後、協力して活動し現在に至っています。これまでの経験をまとめたこの『日本語でボランティア』の一冊が、多くの方の活動の役に立つことを信じています。



セミナー SEMINARS



初心者のための『みんなの日本語初級』の教え方

『みんなの日本語初級』の教え方講座、今回は6～8月頃を予定しています。詳しい講座案内は5月にできる予定ですので、ご希望の方は下記宛お問合せください。

内容：『みんなの日本語初級』
『みんなの日本語初級』
『新日本語の中級』を中心とした中級の教え方
* は各計10時間、は計5時間を予定講座案内をご請求下さい

費用：各15,000円 7,500円

会場：東京、大阪

問合せ/申込み先：スリーエーネットワーク講座係
101-0064 東京都千代田区猿楽町2-6-3松栄ビル
TEL:03-3292-6410 FAX:03-3292-6197
E-mail:ja-net@3anet.co.jp

『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』発刊にあたっての説明会
著者による上記新刊の説明と音声学の講座を行います。

東京会場

日時：7月6日(土) 14:00～16:00

会場：食糧会館(東京都千代田区麹町3-3-6)

定員：100名(先着順)

大阪会場

日時：7月13日(土) 14:00～16:00

会場：天満研修センター(大阪市北区錦町2-21)

定員：80名(先着順)

両会場とも

講師：鹿島 央(名古屋大学留学生センター教授)

費用：無料

申込み：郵送、FAXまたはメールでの申込み

問合せ/申込み先：スリーエーネットワーク講座係
101-0064 東京都千代田区猿楽町2-6-3松栄ビル
TEL:03-3292-6410 FAX:03-3292-6197
E-mail:ja-net@3anet.co.jp

ほん

BOOKS

本誌に表示した価格は税別です。

みんなの日本語初級 翻訳・文法解説ロシア語版	発売中	2,000円
みんなの日本語初級 携帯用絵教材	発売中	6,500円
B4サイズ絵教材	5月発売予定	38,000円
新日本語の中級 文法解説書 英語版	5月発売予定	1,600円
新日本語の中級 教師用指導書	7月発売予定	予価：1,800円
こどものほんご1	発売中	2,000円
完全マスター漢字 日本語能力試験2級レベル	5月発売予定	1,400円
日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学	5月発売予定	1,900円
日本語でボランティア 外国語として日本語を教えるって?	5月発売予定	950円

[日英対訳] / [日中対訳]

日本で暮らす外国人のための生活マニュアル(2002/2003年版)

カトリック横浜教区滞日外国人と連帯する会編

発売中
A5判 340頁
価格：各1,800円

これまでの[日英対訳]に加えて[日中対訳]も新登場。

外国人が日本で直面するトラブルを解決するマニュアルです。入国と在留の手続きから、労働、保険、妊娠、出産、結婚、離婚、子どもの問題等をNGOの立場からまとめました。

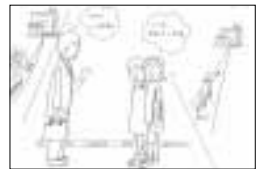


いっしょにほんご(仮題)

小林幸江、横田淳子
(東京外国語大学留学生日本語教育センター)著

7月発売予定
A4変形サイズ絵カード280枚(予定)、
教師用解説付
価格：32,000円

外国人児童に対し学校で即対応ができるように、日本語指導の研修を受けたことがない教師にも使える教材。絵を用いることにより学習者を飽きさせることなく、繰り返し基本文型を提示し、練習させることが可能です。



お知らせ INFORMATION

皆様からの投稿や各コラムへのご質問、ご意見等をお待ちしております。採用させて頂いた方には粗品を進呈いたします。また本誌をご希望の方は、お名前、ご住所、所属をFAX等で編集室までお知らせください。無料でお届けします(国内のみとさせていただきます)。『Ja-Net』第22号は7月25日発行予定です。

メールマガジン好評配信中!

新刊案内、各種セミナー等のお知らせにはメールマガジンをご利用ください。(月一回配信予定、無料)

メールアドレス
info@3anet.co.jp

スリーエーネットワーク研修・教育事業のご案内

スリーエーネットワークは外国人に対する日本語研修をはじめ様々な研修・教育プログラムも開発しています。ご関心のある方は、お気軽にお問合せください。研修部案内書を送付いたします。

活動内容：

異文化理解・交流に関するプログラム開発と運営のお手伝い(学校教育・地域社会等)
講師手配、教材の作成、カリキュラムの策定の相談受け付け
インドネシアの日本語教育機関(国立大学・財団等)での実習・視察

問合せ：スリーエーネットワーク研修部

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-64田中ビル
TEL：03-3292-6193 FAX：03-3219-2890
E-mail：kenshu@3anet.co.jp
http://www.3anet.co.jp/kenshu/index.html

Ja-Net 季刊ジャネット No.21

スリーエーネットワークという社名は、アジア(Asia)、アフリカ(Africa)、ラテン・アメリカ(Latin America)のいわゆる発展途上国の多くが存在する3つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好の促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2002年4月25日発行

発行人 藤崎政子

発行所 (株)スリーエーネットワーク

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-6-3 松栄ビル

Ja-Net編集室 TEL 03-3292-6410 FAX 03-3292-6197

営業部 TEL 03-3292-5751 FAX 03-3292-6195

http://www.3anet.co.jp E-mail: ja-net@3anet.co.jp

日本印刷(株)

© 2002 by 3A Corporation Printed in Japan(禁無断転載)

印刷